

社告

西田先生は文保五年大藏に誕生、三歳のとう
書學會中成に歸り十四五歳にして始めて漢
書と争ひ二十一歳長崎に行て洋學の門に入ん
次て大阪に行き又次で江戸に來る。廻遊の時より
老練の今日に至るまで終始西洋文明の主
義を以て生懐を成したる人なり
其人の

生源は實に我國多事變化の日にして封建門閥の至靜より文明快活の新社會に移り先生亦さうの新社會の組織に與りて力あるは世人の認むる所なり先生本が六十載既往を回顧すれば甚矣一ならず昔に一會の苦難のみならず其行路の實際を聞けば由て以て時勢の眞面目と窺ひ見るに足る可し。先生は之を甚に喜び又知人朋友に語ると曰て老歌の歌本を残し去年來詩に關する記述をして速記せしめ又自から筆を執りて記憶中で往來するものと書綴り、而も集めて一冊の書を成し圖書自費と算して附さに出版せんとしたれども書中の記事讀て或れば又體て記憶に没れたるものと見出しそうと尋ねたる者たるは常子由等は是日のみと見づきと時事新報紙上に掲載す可し。初旬より紙面の許す限り書して以て

時事新報記者誌

リビン鳴の始末

卷之三

外食摄入量

の首府なるマニラに此に来人の手に落したる
を圖譜にして開闢の道はある可らず威を威す
牙にては更らに威風を誇道してマニラには
はこの可しどの詔より吾百姓に贈したる
御恩給たれども後叛に拂れば出を受ける事
本国の一港に入りたるよし果して南洋まで
之の御恩ある中西を其肩垂見なし候今に然
りて身の罪に實に悔ひて如何とぞ可らず
第一の御恩賜する事多きするのみと
御恩賜する事多きするのみと
アシの皇帝は御恩と云ふ
以立せらる所じと聞むるが如くな
せる使の本國の士人等に御立の方なれば五

卷之三